ひむか人模様

力強い音は計算の結果

宮崎学園短大教授・ピアニスト

宮崎賢二さん 69（宮崎市神宮西）

「どうしても結婚するというのか。それなら破門だ」

1964年春、婚約した女性の故郷・宮崎市に東京から移り住みたいと、ピアノの恩師に願い出たが、許されず縁を切られた。それが宮崎での生活のスタートだった。

佐賀県北波多村（現唐津市）生まれ。母の勧めで小学2年からピアノを始め、小学4年からは、毎週片道約3時間かけて福岡市の恩師の元に通った。

佐賀大教育学部音楽科に入学したが、2年間は、優秀な学生を高いレベルで学ばせる「委託生制度」で東京芸大へ派遣された。ちょうど同じ時期、この制度で宮崎大から派遣された蕗子（ふきこ）さんに出会い、伴侶とすることを決めた。母親の看病で帰郷する蕗子さんとの人生を選んだが、「恩師は私に福岡に帰ってきて、仕事をしてほしかったのでしょうね」と振り返る。

移り住んだ当初は、近所から「ピアノがうるさい」と苦情が寄せられ、転居を繰り返した。高校の非常勤講師などを経て、宮崎学園短大（宮崎市清武町）に非常勤講師として招かれ、本格的に指導者と演奏家の道を歩み始めた。恩師とは結婚後4、5年後に和解。「子どももでき、一時的にのぼせていたのではない、と分かってもらえたと思います」と言う。

69歳になった今も、現役ピアニストとして舞台に立つ。披露するのはバッハやベートーベンなどが主で、芯のある力強い音を響かせる。リサイタルを聴いた学生やファンからは、「70歳を前に、どうしてそんな音を出せるのか」「奏でる姿は、とても69歳には見えない」などの感想が寄せられる。

そこには単なるピアノへの愛情のみならず、ピアノという楽器そのものへの理解がある。単旋律を奏でるほかの楽器とは異なり、ピアノは、主旋律や伴奏など複数の旋律を奏でるため、常にそのバランスを考え、計算し続けなければならないという。「ピアノは最も思考的な楽器。頭で考えないとダメなんです」。学生にもそう繰り返し、教えている。

クラシックの中でも古典やバロックを愛してやまない。特にバッハにあこがれ、学生時代から、原典版と呼ばれる作曲当時そのままの楽譜を研究してきた。バッハが存命した当時の演奏や技法に肉薄したいと考えているからだ。

来年、同じ年の蕗子さんとともに古希を迎える。蕗子さんは一足先に宮崎学園短大の指導者を退いたが、自分はまだまだ現役を続けるつもりだ。「今年はショパンとシューマンの生誕200周年。2人の曲も究めたいですね」。その目は少年のように輝いている。

（内田遼）